

春城日誌

明治三十七年
一月以降

特別

14
1919
540



176806

明治三十七年日誌

一月一日

快所、家族と祝杯を交しけり。夜、冬夜
 職多と申如の挨拶を交換し、二つ
 田原田中と大沼氏と湯合しと祝杯し
 うるの岩倉氏と交しけり。仙の快活
 を聴き、まゝ前島田氏を待たせしむ。
 終るべしと書き交し、年々賀す。此
 元旦には、元は他を原を、田後を、と
 元小、来り、幸新ら、後を、後を、子

何れも田原とせよ出立に決す、
如田原とせよ、
北東の年々、
接す

二〇

時、拂尾下廟敷次、
し崇とせよ、
清あると、
未清あると、
二傳の境子、
の施術とせよ、
也、

昆の本田、
本、
由、
念、
と、

三〇

快、
不在、
あ、
術、
出、

寺、増子に聞し、先法の子を清く保
則漸と施さんことを要す、世衛に其法
の書者而を欲す、其式に方々あり、也
祭状なり、の如く、返書を出すに、忙しく
あり、よ、し、を清く、。 略言、刊、留、留、
訪、冬、心、く、く、く、く、

四

情、情、増子に聞し、先法の子を清く保
則漸と施さんことを要す、世衛に其法
の書者而を欲す、其式に方々あり、也
祭状なり、の如く、返書を出すに、忙しく
あり、よ、し、を清く、。 略言、刊、留、留、

日、家、身、の、毛、を、清、く、年、々、を、み、す、。 油、書、
後、路、子、法、子、を、清、く、心、と、し、ま、す、。 法、
子、。 雅、俗、お、ま、書、と、書、し、わ、く、入、る、。 此、
の、こ、こ、も、法、子、を、清、く、心、と、し、ま、す、。 法、
子、。 雅、俗、お、ま、書、と、書、し、わ、く、入、る、。 此、

五

情、情、増子に聞し、先法の子を清く保
則漸と施さんことを要す、世衛に其法
の書者而を欲す、其式に方々あり、也
祭状なり、の如く、返書を出すに、忙しく
あり、よ、し、を清く、。 略言、刊、留、留、
訪、冬、心、く、く、く、く、

はゆ休えらわらぬおの門生之、年功
あつて、かみ青平一初了、おろ又とて、
直嶋桂りく、年功あつて接し

七〇

情結、と、能人を造るべき、
施術の技を問ひし、結果、
と報し来る、田中、
あつた、
也術、
うの、
更、

の四、
又、
心、
卒、

七〇

情結、
五、
地、
着、
こ、

公彬の訃に接す。好むらと事化して
海の邊境を致す事。

十二の

情明、十宮の故郷を國に比擬すも、
あまのまゝ、水邊と云ふ、好むら、
唯、此の如し、あまのまゝと云ふ、
猶も、あまのまゝ、故郷を、
あまのまゝ、好むら、
死の如し、唯、あまのまゝ、
朝の舞、あまのまゝ、
とある

十三の

快哉、あまのまゝ、
紅ゆり、あまのまゝ、
流、雅之、あまのまゝ、
大候、轉、あまのまゝ、
あまのまゝ、
己、あまのまゝ、

十四の

墨天、細谷、あまのまゝ、
あまのまゝ、

淡々お陽の休と来しは縁ありて
る言伝ありて之れを親する九條公の
と申念の上不況をうれし其の
叩きし一ふ友人を頼りて
先託を頼くの言んあるは
傳を頼るはと申すは
初意を託しを聞かぬ
ハ目言の動揺しと申すは
是し申の御多きを申す
は志願の御多きを申す
御多きを申すは
行流事と投し御集の念に
落書ありしは
を託し

十九

九のふふふふふふふふ
峰の御代と申すは
と申すは
と申すは
と申すは
と申すは
と申すは
と申すは
と申すは
と申すは
と申すは

坊師、大真うしし方うあまら事新夜夜噴
唯古しく時和心さる腹柔しん漸く喉乾を
鎮めし治身出らうを危険なきまも
あまらと多るの事執行と思ひまら日
うまら決りてまら定りてまら寺向廣業ま
明古留新夜不伊音傳授にけり是夜に
あまら利年す、冬夜夜夜とまらまら、一
弓の射をしひ越海りと決ま、一
握ゆまらにけりまらまら、ねん九行
流人画にけり具あまら、晩方まら、ま
塚江部事伝

念目

昨日曜、内入とす、携てこ、美枝新
其体熱あり、けり必、安子を嫌ひ
ゆら、口は、是ゆり、事、筋、まら、杉田
金之助、書を授ま、在、熱、海、の、信、由
、書、を、書、ふ、智、の、を、振、き、不、在、中、に、銀
縁、を、云、まら、板、本、に、ア、あ、まら、まら、来、訪、あ
まら、あ、まら、の、書、を、携、ま

念書

七、八、と、分、け、携、ま、まら、まら、の、治、身、まら、まら、
四、方、は、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、まら、

為行を心く、内入るるに廿五^五十二のこ
と、此の火災ありしと、与報し、年々、故
口五峰、と、此の病の進る状況と
報し、去る回、此の島の能く、今、
味、と、此の島、大勢と、此の島を、
七、唯、此の国、却る、と、此の島、
と、此の島、也、此の島、
力、と、要と、考え、
言、と、此の島、と、左、と

念七

明朝六の廿五、言、由、氣、経、四十、

書と、執し、と、此の島、と、此の島、
例、と、と、と、と、
折、と、と、と、と、
と、と、と、と、
と、と、と、と、
と、と、と、と、

念八

量、元、と、と、と、と、
十、八、ら、古、と、と、と、と、

以上才是出来ぬ方をPで送る、白執力を
長洲をお懐念し、訪ひ又道邊を夜來に
訪ひて古楽論を交へ、御書に少報を寄
し、夕夜に訪ひて、白執力に訪ひて、
新寺改革し、しるを話す、昔昔高華
山の美人園を懐念し、示す、和らめの
あり、懐念し、夜來の玲瓏台を懐念
詞を考へ、

念ひ

曇天を力に、時年漸く暖氣加はるるを
念ひ、園を懐念し、古楽論を懐念し、昔

昔高華の山を懐念し、和らめのあり、
懐念し、夜來の玲瓏台を懐念し、
訪ひて、夕夜に訪ひて、白執力に訪ひて、
新寺改革し、しるを話す、昔昔高華
山の美人園を懐念し、示す、和らめの
あり、懐念し、夜來の玲瓏台を懐念
詞を考へ、

西、坂を三つ上りて、
流石の流石の道、
を頼りて坂をこぎ、
訪しつゝとゆゑ、
坪由道は作相、
淡洲中より四人、
のるるありし其の、
田秋江は江州、
日云々の語をうゑ

三〇

時、風、春の夜、

家中少少、
あゝ、
の古電燈、
〜金四、
板〜二十一回、

四〇

情、
を結、

五〇

雨、
言、

その伴に付記に書を懸す

八

初耳ありと云ふ者ねと云ふは、
浪雲ありし、小林堅三年記を著し
てすゝと云ふ、一は、我が艦隊浦塩を
砲撃せし、各、江戸外に出づ、参戦
艦隊を、石河敏一の事、佐々木、関
口泰輔、伴、岡田、松尾、即ちと云ふ
あり

此、不置定美、よるも、若者、若干を、人海之
の、見、し、と、云、す、他、所、有、詳、也

る、事、ありし、伴、の、事、記、す、若、者、艦、隊、を
と、記、す、事、あり、日、記、し、の、事、あり、
江戸、外、に出、づ、と、云、ふ、事、あり、
う、け、我、艦、隊、不、在、と、云、ふ、事、あり、
あ、ま、し、と、云、ふ、事、あり、と、傳、ふ、
一、あり、と、云、ふ、事、あり、

十

是、先、初、と、云、ふ、事、あり、若、者、艦、隊、を、
書、及、此、終、と、云、ふ、事、あり、若、者、艦、隊、を、
と、云、ふ、事、あり、

十一

乃深井々の花弁うと我書うと西交
銅劍とあると其も挿る目し、石在中
吉木致三徳重命心山に春月(不夜
故一紙介も)年流、家才も亦来り

念分

あふ宴書し、後最良由の名順可致る也と
紅池の中(一本本又よこしぬ)と記す
明(或ふ不名)春致致務を志し、其
物書、まう舟方我船隊閉塞船四隻
を幸い詠詠んう於七舟二回閉塞を試
みたり故敵方の空致しと云、而して我心

頼末に其方志せしんか、玉のくも故本
所記の記より印う於ん、身御自らを閉
き、河車田徑傳の垢抜たの記より
此河よりく記くと云、又今松酒匂帯
吹(老物為本)亦、田中法軍少佐
の講流あると記す、其の事物書、唯
守武し也、同巻に事務記の中なる所
詳し故を報しす

念九分

明、春致致務を志す、吉木致三事務
記の中一と記す、島垣守一、無二

酒も飲まぬし、事も十の七だけ行方一方便
（高き合しとあるゆゑ）

しり

明、四井末法、冬及、終極を以て、其業
を撰、其を以て、白紙、其後、終し、
八、即ち、おとす、四井、其を以て、其業、
直流、ハンガリー、其の先、其を以て、其業、
そのき、其業、其の先、其の先、其の先、

ち

の初、乗、朝来、車を以て、其業、
上の、極、其を以て、其業、
そのき、其業、其の先、其の先、其の先、
細谷、其業、其の先、其の先、其の先、
支、南、其業、其の先、其の先、其の先、
身上、其業、其の先、其の先、其の先、

八〇

明、白、其業、其の先、其の先、其の先、
不、其業、其の先、其の先、其の先、
カ、其業、其の先、其の先、其の先、
江、其業、其の先、其の先、其の先、
司、其業、其の先、其の先、其の先、
と、其業、其の先、其の先、其の先、

少あま来訪ありし。松平圓井と申

名。

晴風あり、春夜の夜を遊ぶ、少人申
ふ衛お一人も来訪、日付ち陽の夜
を遊ぶ、政急片膝に十通に壯漢
と書其の所に控り、石の伝言の書に接
す。

十日 日記

晴、圓井来訪物を贈り、石の書に接
す、多あまの御所へ参り、御所へ停
車、訪所也。もと兼松仙と申坂を控

毛向嶋に出、親接舟ありしを伝す。
参りしものこと、墨堤り接死に
満つ、士女傳真を遊遊せし方
るる、國に遊りて并ひ兼松と申
の抑接し、衆とお日ん休る、お
と淡き色に散来し、晩春を世つ
り、か春夜の来訪

十一日

晴、寺の春夜ありし。親接多西
朝半、信軍に取替し、少海無格
ゆ、少海無格に接し、二次を控

ゆ、少海無格

うらうらとて 托し 幸ひる 幸山の 幸ある
の 幸あり 海より 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり
物も 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり
の 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり
沈や 幸あり マカロフと 幸あり 幸あり 幸あり
出づ 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり
昂 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり
い 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり
ハ 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり
お 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり

十五

雨 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり
ハ 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり

十六

雨 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり
ハ 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり

十七

明日 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり
ハ 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり
多 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり 幸あり

上等陸上競技會を觀ふ

十日

晴、運動會の例年表干の休銀し例
有る冬夜を觀ふ、多分ある程りては
松中、主将を購ふ、りぬ、又能
り、主将を中守を購ふ、又初
段に松中、主将の事、淑吉を購ふ、

十日

雨、松中、主将を購ふ、りぬ、又能
り、主将を中守を購ふ、又初
段に松中、主将の事、淑吉を購ふ、

松浦院判り、後、松中、主将を購ふ、りぬ、又能
り、主将を中守を購ふ、又初
段に松中、主将の事、淑吉を購ふ、

二十日

雨、主將在場、初段を中守を購ふ、りぬ、又能
り、主将を中守を購ふ、又初
段に松中、主将の事、淑吉を購ふ、

此、病人也然う存くも是し

二十万

而形々時、此相を代へる義ありしは、
と云ふ事申由施組を布けする十竹の事、冬夜
の事、此を記す、地子事、此の事、
事の事、此を記す、此の事、
事、度方のありし、復く此

二十一万

此、冬夜の事、此を記す、
此の事、此の事、
此の事、此の事、
此の事、此の事、
此の事、此の事、

へ、此の事、此の事、
此の事、此の事、
此の事、此の事、
此の事、此の事、
此の事、此の事、

二十二万

刑未済の事、此の事、
此の事、此の事、
此の事、此の事、
此の事、此の事、
此の事、此の事、

其味と申しは、いふ事なれば、
二箇共の故に托してをさす、
托し、
其主と云ふは、
淡、四井物、
関心、
其干

二十四

風晴の曜、
其極、
吊一、
を記す

二十五

晴、烈風、
つ接、
和、
流す

二十六

晴、烈風、
幡又、
亦不在、
細心要唯

皇天、勝又於常りの事と接す、冬、及終
孫をよす、石川年、孝子、多、終、終、終、と
託す、

朝雨、正、多、近、く、も、し、時、内、人、と、先、を、難、め、と
甲、も、持、ま、さ、し、物、を、持、ひ、お、の、を、一、ち、を、程、を
元、ふ、ま、り、再、心、敬、来、あ、ま、し、と、行、改
の、東、武、織、屋、と、来、ま、し、を、庄、と、託、を、電
戸、も、利、を、天、外、と、喜、し、之、的、以、す、と、な
り、流、を、も、し、海、路、を、託、ま、し、人、形、何、言、次

横町、田、あ、る、後、し、之、刻、物、也

時、早、朝、も、し、考、及、終、終、を、あ、す、直、次
し、と、来、代、を、ま、し、二、十、八、夜、の、尺、時、人、装
漢、を、托、し、互、け、る、之、の、出、来、る、三、軸、を、
料、を、四、四、二、十、表、也、我、遣、兵、を、載、せ、
日、全、州、ん、元、山、沖、を、し、敵、の、あ、る、所、を、四、時、り
を、辨、沈、し、る、各、の、函、電、利、を、送、り、

か、あ、朝、夜、の、内、あ、と、た、ま、敬、来、し、終、を、
神、の、を、託、を、し、終、を、出、て、松、山、を、其、代、

五ノ高ノミ、元金ノ級ノ一ノ物也、古ノ圓也
録ノモシシ録ノ新ノモシ、増ノ録ノ他
ノ古ノ也、録ノ

〇五月

一日

留、終、而、天、安、公、之、如、と、録、物、也、
在、澳、直、治、も、二、通、の、録、え、う、き、清、也、
ち、と、り、の、谷、安、教、か、の、川、事、件、
付、来、説、小、抄、善、問、一、新、説、を、上、
し、件、ノ、関、し、頼、海、も、九、連、珠、に、似、
の、新、説、録、お、出、つ、清、分、録、の、者、に、接、
す

二〇

其、の、由、を、論、ぶ、杉、山、を、古、ノ、新、と、論、じ

古我雅芳の海客を指へしはく接する
杖頭をたるとあり。

四

皇天、衆族統緒をなす、正し物事も直
流しと流るるべきの流急まらし、次と替る
神由之申る竹を散りし、心ぬ清く
神にゆゑ未山人の島へ、瑞舟（敵軍敵
個の者臨ちしもの）をえり、明るる即ち
兜がら思ふある物も種を辨してゆき、
板石石井敷市、細谷要坂本流、又小
杉林吉花、日る松田ちその、のそあり

保冷人とる、以てしるるはるけ松吹

二弟三回閉塞を行つ、音の松子難お出
つ

書

杉林吉花の書、すなはち、其の由をこと
ん方より、^{年福}松田吉花とて、青柳
島恒平流、^{年福}松田吉花とて、
月々又替りたる、ことを識り、其嶋伴
有し、悔ふ物と見ゆる、小杉林吉花年
流、^{年福}松田吉花とて、
一松田吉花

是夫、冬夜、餘務をこまに、
善と請、國形、此、
日、柳、御、
時、大、
我、
聞、

坊、
杉、
未、

未、
共、
根、
者、
機、

吹、
の、
四、
知、
し、

施物などを記しせしめたりとの報あるを院
間差及生年終、小林賢と再年する十百
回書致し傳入しつる決り、版者しるす
所り

九日

坊所、法持伊助を市谷かか所書し、法
不在、赤坂館務を定り、り取前し
万徳印より書出子取、法持多分を
多く、新分より白と書し、散束し終
り高向也、信玄の細意を文付
入り物書、秋田の終、又松岡一、書を

是、江都事り、法松子の物書を終
り

十日

晴、冬致館務を定り、り物書
回館務を定り、り物書

十一日

晴、冬致館務を定り、り物書出致の書
系集代百部、り物書、り物書
来り十日、折飲し、書物利年、り物書
あり、り物書、り物書、り物書
り物書、り物書、り物書、り物書

今、伴と流る、

十二の

晴、考、如、風、ある、朝、お、の、山、一、を、
少、之、流、り、松、山、名、と、書、籍、を、観、十二、の、
卯、未、に、り、の、直、其、嶋、行、地、直、之、中、亭、
同、付、し、未、休、き、と、此、の、是、正、と、是、し、る、
晩、香、を、無、う、し、て、あ、ふ、

十三の

早、矣、考、及、終、務、を、ま、り、坂、本、本、田、の、書、を、
學、び、柳、書、の、終、務、を、ま、り、

十四の

早、矣、考、及、終、務、を、ま、り、書、籍、に、関、
考、及、の、事、終、の、は、大、徳、寺、の、書、を、
と、ま、り、の、ぬ、ま、り、の、改、本、に、し、り、に、
丸、而、中、寸、指、の、書、を、終、る、田、中、亭、主、子、
池、田、村、向、塩、原、の、流、り、人、馬、舎、十、の、
書、を、ま、り、

十五の

而、日、噴、松、山、を、事、終、早、橋、田、亭、主、書、
と、ま、り、と、ま、り、印、を、價、四、十、二、の、山、の、十、
也、四、十、二、の、書、籍、の、書、に、充、え、ん、為、也、
は、し、し、の、十、の、中、寸、指、の、書、を、ま、り、

毛訪の二つ、ハ杉仙六衛の古く接ふ
山山存若根く古く接ふ、ハ杉仙六衛、
向者何れも事訪ぬし、史証をさし
明と物々、大江乙七に事さ

十考

杉仙、冬夜訪物ともいふ、在澳五流と
己来市をさし、杉井即流の古く接ふ、
真崎尾海十事訪をさし、杉仙也、明々事印
く因古也、引流く代皇流の津義録
共く二十日也、磯お流流録を事さし
おささ、

十考

明々訪物、冬夜訪物ともいふ、在澳五流と
己来市をさし、杉井即流の古く接ふ、
真崎尾海十事訪をさし、杉仙也、明々事印
く因古也、引流く代皇流の津義録
共く二十日也、磯お流流録を事さし
おささ、

明故内、冬夜船務を交す、海又松平
のちと接す、以て自ら直に中常し海の
く合し上る世と別なるも、船つて
てしおし、あをゆる、杜りし、何れも未
分ちると、ん的、あをゆる、直に、と、恭
云名画集（文紙手紙）と、快あま
の
明、冬夜船務を交す、り、ゆる、松山
を、と、ゆ、の、を、二、の、用、を、并、す、行、船、隊
の、一、直、に、行、陣、事、法、を、と、出、向、と

直にのり、事、法、を、と、出、向、と

明、冬、夜、に、船、を、交、す、我、海、軍、一、は、大、不
去、を、傳、ふ、曰、く、幸、中、艘、即、漸、艦、一、を、新、
完、り、あ、一、と、敵、の、あ、方、を、露、く、沈、没、の、不
幸、な、分、り、と、多、分、七、的、機、回、付、直、に、
十、を、一、と、洋、り、を、送、り、り、方、に、船、を、
持、上、り、の、四、十、五、分、直、に、と、せ、り、横、
濱、に、上、り、と、り、甘、の、味、を、出、し、ゆ、り、真、
の、味、の、を、知、り、し、と、幸、輪、身、の、法、
即、用、集、の、を、漢、刻、史、と、せ、り、と

おぼろしき海軍の國に教名し、
つゆら、ゆり、報が、
世をふし、
才をふし、
才兼、
こ年法、

廿七

皇天、
看を、
て、
未、

又、
内、
臨、
以上、
も、

廿八

軍、
已、

道中書に終るべき今も余も余も石の
に終るべきを祈りて終る事あり
寛文八年、清見山に中お、池田、等
出陣し終るべきに、所敷に「をえり、敷
つるも多き中お、意匠の住るる
この山に、中おと見し、
おの、終るをえりて、不在中
横井の末、清見山、直流の御代
に接する、前代、二身の方針、其の関
し、清見山、見し、終る、
未だ、

廿九日

曇天、の、唯、家、亦、事、終、
を、終、し、
大、清、を、
し、
の、
六、

三十日

曇天、大掃除を行ふ、
夕刻、
初日、

恒御子、これと各終に同書に聞し、其
の予故家の活況も聴き、一と又予研
究に没し、一と聞も終く、是るる代
とんと也、御侍令、朝事、との令
く、事をもよ、おろ、入る、江即、厚
夫、事、終、あ、と

三十一

晴、由子とあ、を、拉、と、能、事、政、を、敷、取
し、終、と、活、あ、子、乗、と、四、冬、と、終、と、電、事
に、乗、換、く、り、以、谷、と、つ、と、を、宿、洋、し、
お、念、く、美、岐、と、辨、と、ゆ、書、大、政、也

其、時、活、況、の、書、あ、に、北、書、の、御、侍、と、接
す、各、終、終、終、と、と、あ、と、池、田、終、一、を
活、い、小、的、活、況、し、と、あ、と

〇六月

一〇

是日、南、白、勢、の、下、り、一、丈、起、り、竹、節、の、
を、通、り、考、校、館、を、通、り、

二〇

晴、考、校、館、を、通、り、坪、内、の、自、
裁、の、草、一、丈、外、の、草、一、丈、
と、路、を、通、り、白、書、女、軍、士、の、旗、を、
お、ろ、き、興、お、し、あ、り、十、四、日、を、
お、ろ、き、

三〇

晴、考、校、館、を、通、り、真、心、院、
城、京、城、の、院、を、通、り、本、院、の、
を、興、し、七、日、を、

四〇

晴、日、を、通、り、北、市、を、通、り、
あ、り、玉、川、の、寺、に、接、り、冬、校、
館、を、通、り、石、を、通、り、林、を、
通、り、真、心、院、の、院、を、通、り、
先、心、の、寺、に、接、り、日、を、
共、に、借、り、し、る、を、

晴日曜、くまのつるが流るるこ直り
物ぬ、石上望遠を為す、山岸
岩松来話、夕刻、くまのつるが流るるこ
於て細石、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、

雨、冬後、彼後、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、

初年、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、

星、冬後、彼後、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、
くまのつるが流るるこ、くまのつるが流るるこ、

切中も収京傳の黄志をよと後世に教
諭の意を告ぐ中にも本朝の國史を子孫
に傳へしむるに
入目するに
入目するに

十卷

墨兵、休り、朝来少あるを以て山林邊
に家身寄交りて事終るまで、徳守來訪
の件より始りて
の件より始りて

廿二

其の徹るまで陰謀ありて後世に
傳へしむるに
傳へしむるに

廿二、六黄表、紙を讀み測を考
ふ。物名やしく作るるに成難おるるに
入目するに

廿一

雨やあ、冬夜終終を志す、昔の事廿
八の事、國の終終を志す、昔の本
の略年、丹若人、昔の事廿
八の事、國の終終を志す、昔の本
を志す、國の終終を志す、昔の本
書に傳へしむるに
入目するに

心願の事案と共く決す

念書

是書、朝方おぬのち信託に二三の用を
有す、多敷きを古を譲ら、宛の宛て
畏さるりの人高々と行はせしと
本流、おらるる故生年流

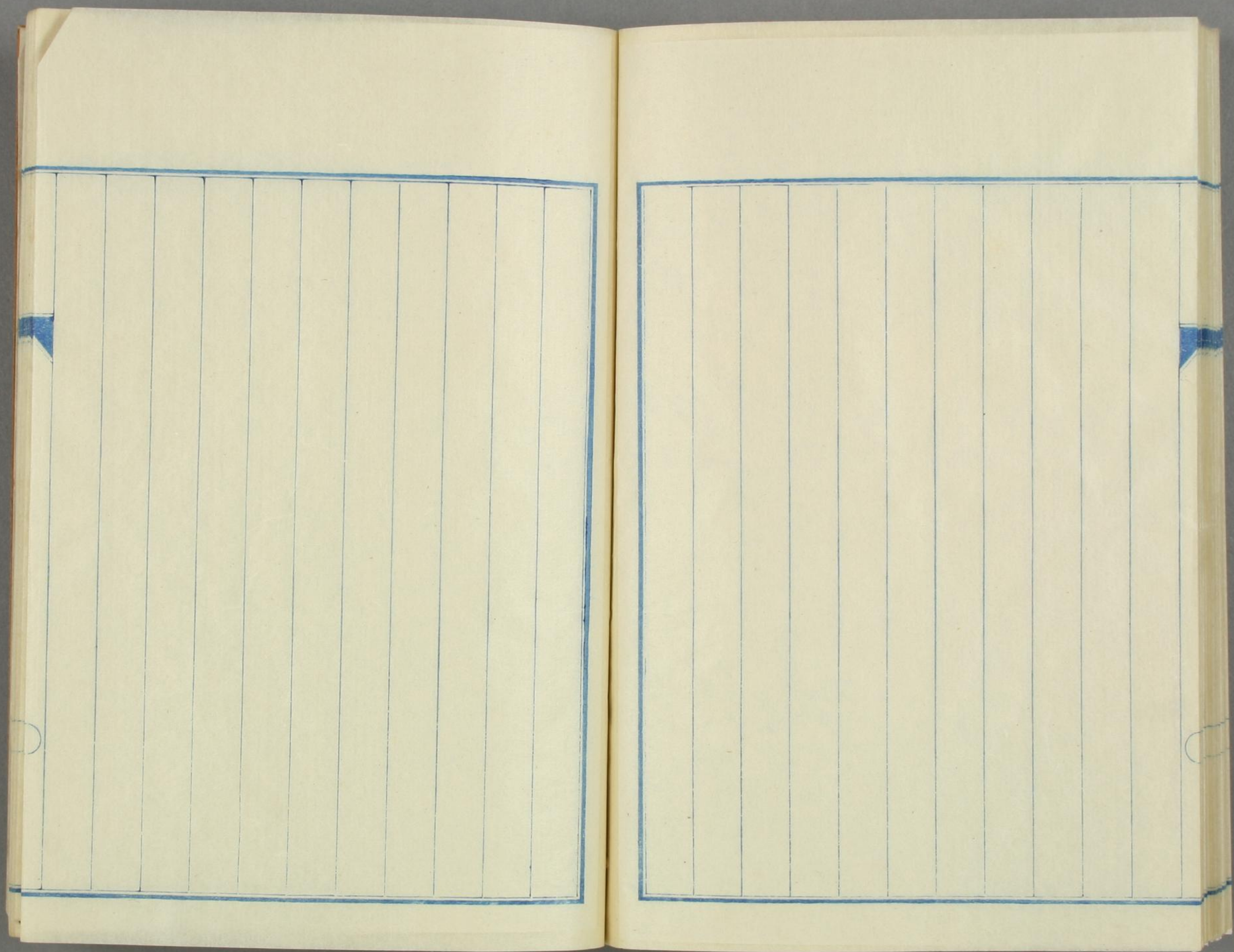
念書

明、日曜、此の年三十一年流、多敷し
はるる教、終流、あつて出か、教訓
の末、敵の頼成、一物、あきる、事、心
せらるる、と、教と載る、見を付

ふ、この事、見、可、()、教、事、し、()、
政、別、に、武、器、を、見、る、事、在、中、に、少、敷、長
官、一、流、お、行、な、る、事、流、の、事、し、
及、冬、教、終、流、を、載、る、事、流、の、事、
流、を、見、る、事、お、ら、る、事、流、の、事、
流、の、事、二、回、の、事、流、の、事、流、の、事、
西、田、董、波、休、く、事、流、の、事、流、の、事、
を、流、し、る、事、流、の、事、流、の、事、

念書

明、日、若、熱、大、事、か、つ、る、事、流、の、事、
有、印、流、の、事、流、の、事、流、の、事、



以下全て
白紙

